

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	鍼灸治療と運動指導による避難所での支援活動
演者名	柏原 修一、中沢 良平
所属	一般社団法人 福島県鍼灸師会

目的

福島県鍼灸師会は、東日本大震災による原発事故から避難されてきた県民の方たちに、鍼灸医療と介護予防運動指導を提供してきた。

避難所は広義の在宅とみなされるので、在宅ケアという視点で活動を行うことを念頭に置く必要がある。在宅ケアは単独職種だけで活動するのではなく、医療連携として多職種協同で行動することが求められている。

本報告は鍼灸師が在宅ケア、つまり地域包括ケアシステムの一員として活動すれば、国民にとってより厚みのあるケアが提供できることを提言するものである。

実践内容

平成 23 年 3 月 11 日の震災発生以降、活動した場所は全県にわたり、3 月 17 日から 6 月 19 日までの約 3 ヶ月の間、延べ人数として 1,034 名に治療および運動指導を提供してきた。

主訴は痛みやしびれの他、冷えや不眠、便秘など非疼痛性のもも多かった。また介護予防運動指導員の資格を持った鍼灸師は避難所内を巡回し、エコノミークラス症候群の予防を目的とした運動指導を行った。5 月後半からは廃用症候群の予防も視野に入れ、筋力増強のメニューも追加した。

実践効果

避難所は固いフローリングに毛布を敷いただけの場所が多く、腰痛や膝痛を訴える方が多かったが、施術後は「楽になった」と喜ばれた。また段ボールで仕切られた空間のみというプライバシーの確保されない環境で、ストレスによる不眠に悩む方も多かったが、この解消にも鍼灸は役立ったと確信できた。

考察

災害時の避難所というあらゆるものが不足した環境でも、プライマリケアとしての鍼灸は大きな存在意義があることがわかった。今後は地域包括ケアシステムの一員として、他の医療職および介護職と連携しながら、地域医療の充実に貢献していきたい。